

静岡県の外來生物

アメリカネナシカズラとハマネナシカズラ

大貫貴清



写真1 ハマヒルガオに寄生するアメリカネナシカズラ(左)とハマゴウに寄生するハマネナシカズラ(右)。

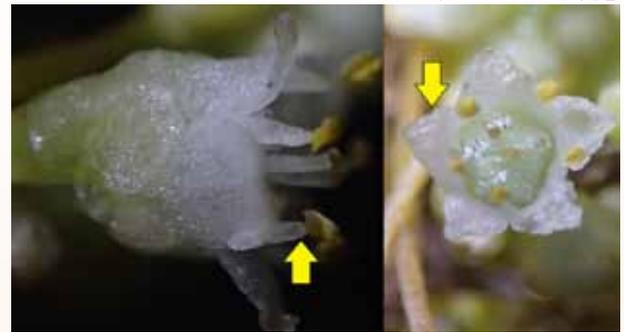


写真2 アメリカネナシカズラの花。花弁が大きくめくれ(写真右矢印)、雄しべが突出する(写真左矢印)。



写真3 ハマネナシカズラの花。花弁があまりめくれず、雄しべが花弁よりあまり突出しない(写真左矢印)。また、萼の中央が大きく隆起する(写真矢印右)。

世界文化遺産として富士山の構成遺産の一つに登録されている三保松原付近の海岸は海浜性の植物が多く生育する場所としても知られています。ハマゴウ *Vitex rotundifolia* は三保松原付近の砂浜でも多くみられる海浜性の植物で、長く匍匐し砂に埋もれても生育できる茎と、7~9月にかけて咲く青紫色の花が特徴です。ハマゴウの群落は三保半島の砂浜全域に多くみられますが、この群落を観察していると、遠目に黄色く見える一帯があることに気づきます。近づいてみると何やら黄色い糸、あるいはラーメンや焼きそばの麺のようなものがハマゴウに絡まっており、全く知らない人にとっては、釣糸のようなゴミが絡まっているだけにしか見えないかもしれません(写真1)。これはネナシカズラとよばれる植物の仲間です。ネナシカズラ類は世界中の温帯や熱帯に分布する植物で、ヒルガオ科、すなわちアサガオやサツマイモなどと近縁なグループに属します。この仲間はアサガオやサツマイモなどと同じくつる性ですが、多くの種類は葉緑体をもっておらず、葉もほとんど見えません。つまり光合成によって栄養を作ることができない種類が大半です。また根も地中には張っていません。では、どのように栄養を摂取したり、水を吸い上げるのでしょうか? この仲間は発芽した時は他の植物同様に地中に張る根をもっていますが、成長しつるを伸ばすと、宿主となる植物に巻きついてその植物に根を張るのです。この時、元の地中に張っていた根は枯れてしまいます。つまりこの仲間は他の植物に寄生し、栄養や水分を吸い取って暮らしているのです。

三保の砂浜でみられるネナシカズラ類はほとんどがアメリカネナシカズラ *Cuscuta pentagona* という北アメリカ原産の外來種です。アメリカネナシカズラはハマゴウ以外にも多くの在來種や園芸種など様々な植物に寄生し、覆いかぶさることで植物の生育を阻害します。このため外來生物法の要注意外來生物に指定されています。一方、三保の砂浜でみられるネナシカズラ類にはハマネナシカズラ *C. chinensis* という在來種が生息しています。この種は主にハマゴウに寄生しますが、全国的に非常に減少しており、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定される希少な植物です。三保半島では1970年を最後に確認されていません。筆者は今年の7月に海浜性植物の種子を収集する過程で本種の三保半島での生息を44年ぶりに確認いたしました。アメリカネナシカズラとハマネナシカズラは非常によく似ており、ちょっと見ただけでは見分けがつかえません。両者を見分けるには花の形状を見比べることで、アメリカネナシカズラの花は花弁が大きくめくれ、雄しべが花冠より大きく突出して見えます(写真2)。一方でハマネナシカズラは花弁があまりめくれず、花冠から雄しべがあまり突出しません。また、最大の違いはアメリカネナシカズラより萼が大きく、萼の中央が盛り上がることで(写真3)。よく似た2種が一方で外來種、一方で絶滅危惧種というのは駆除、あるいは保全を考慮する上で慎重にならなければいけない点であるといえます。